

でもればある程期待も大きい。

この狩生新洞は昨年夏、佐伯市觀工課と狩生地及び、保護開祭を手がけた。觀光資源として開祭し、一般に提供するまでは、条件整備も多難をきわめることである。なせかなら、この狩生新洞は、入洞に相当な用具や準備がいる。洞内は緊破の影響が残り、落石などの危険が多い。第一、入洞そのものが十数人のロープによる収めならぬので、青壯年時代の体力が必要である。

私は、洞内の景觀を釐乳洞のいのちととらえず、學術的に鐘乳活動の一つ一つに目を注ぎ、大自然の管見、その記念物として受けとめ、保存保護には万全を期してほしいものである。

開祭と破壊は、表裏一体という説もあるが、洞窟の自然をよく見きわめた上なら、破壊は最少限に止められる。即ち狩生新洞の特異な価値を認め、万全の賞護管理が望まれる。その辺の事前調査も、管理体制の確立が、觀光資源として公開される以前に必要である。

この郷土の天然記念物が一般に公開され、學術的研究の対象となり、一般の探訪が許されるのはいつの日になるのであろうか、待た速しいものである。(おもしろ)

(埋葎) 清江 高野のお四圍山

清江の町を一望出来る高野の山は、八十八ヶ所を巡拝する本四圍山がある。因のように自然石でかまされたおたま屋の中には、本四圍の寺々を「查摩」が刻まれている。これはどこにもあること。



このおまは、いさかちがって、仏様の頭上に入れ所番号、右側にトサとかアワとか片浪名で固名、その下に寺の名があり、左がわに寄進者の、浦の名と名前、例えば「いのかくしおよし」といった格好。おもしろいと思つた。(用)

紹介

富尾神社の神踊と杖踊

— 黒沢に伝えられている民俗芸能 —

会員 山崎 作 一

これまで何回かこの誌上で紹介してきました。榑津礼城主佐伯惟治公さまの富尾神社は、私の部落青山黒沢の船形(ふねがしたと呼ぶ)に鎮座してゐます。

この神社は黒沢部落の氏神で、祭典には四百年の昔から、神踊と杖踊十八番の奉納行事があります。大正から昭和の初めごろが特に盛んで、戦時中もたゆることなく、村中ほとんど全部が参加し、お祭り前一月間踊りの女らし(練習)が行なわれていました。

終戦後日当部落もお多分にもれず昔からの風習はさびれ、神樂祭典は取りやめ、ただお祭だけとなり、老人たちが神踊と杖踊三番だけを諸願成就のお礼として奉納していた有様でした。しかし後を継ぐものがなく、年々人数が減る一方、神社に對しまたこれまで伝えてくれた祖先に對し、まことに相すまぬ次第と苦慮してまいりました。

とこもが、去る昭和四十一年三月、民俗芸能として大分県の無形文化財に指定されました。その当時、深天多喜男先生たちにより、「大分県地方史」や文化財調査報告書「大分地方民俗芸能」などの本で広く紹介されました。その時は部落民一同元氣が出て、全員で祭礼行事を行ない、深矢先生からもご覽いたたまりました。しかし神踊、杖踊とも後継者がなく、又々さびれがちとなりました。時世がちがって、若い者たちが祭礼行事など、見向かないようになったかんでしよう。